

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所主任 吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

近年、夜の街が青いイルミネーションで彩られ、美しい光の芸術が私たちを楽しませてくれています。そして、新しい科学の光が私たちの暮らしを豊かにしていることを実感しています。2014年、3人の日本人が青色発光ダイオードの発明によりノーベル物理学賞の栄誉に輝きました。ご存じの通り、この科学の新しい光の登場は、照明機器、信号機、電光掲示板でイノベーションをもたらし、スマートフォンやブルーレイなど新しい技術を導き、さらに農業、漁業や文化など様々な分野にまで波及しています。今、私たちは科学の力を体体験しているのです。科学は自然科学に留まらず、文化や教育を含め境界無く全てを含み広がっていきます。次の新しい科学はどこで現れ、育つのか？ 私たちは広い視野を持って様々な分野での科学の芽を見つけ研究を進めていく必要があります。

私は平成26年度より総合科学研究所主任を務めることになりました。自然科学や人文科学などの垣根なく総合的にそして科学的に研究を進めるこの研究所の役割を大事にしていきたいと考えています。平

成26年度の総合科学研究所においても新しい科学の芽が現れ始めていることを感じます。「創立者越原春子および女子教育に関する研究」では、春子先生に関する研究を通して、過去から女子教育の未来像へとつなげる研究が進められています。「大学における効果的な授業方法の研究6」では学士力の育成のための教育方法の探究が科学的に進められています。これらの研究が創立100周年を迎える学園でのこれからの教育に生きてくることを期待しています。「幼児の才能開発の研究」では、付属幼稚園において子どもたちのコミュニケーション能力を高めるための研究が行われています。この研究での豊かな言葉の獲得は幼稚園での教育だけでなく本学の学生に対しても当てはまることであり、この研究の成果が将来、広く波及していくことを期待します。

今年度は2件のプロジェクト研究が進められ、そして来年度も2件の研究課題が採択されました。様々な分野での新しい科学の芽としてのその成果と今後の進展に期待しています。

総合科学研究所における研究の成果が新しい科学の芽となり、その成果が本学に、そして広く波及していくよう力を注ぎたいと思っております。今後とも研究所の研究や事業にご理解とご協力を頂きますようお願い申し上げます。

平成26年度 総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」報告

〈地域貢献(H26年度)〉 短期大学部生活学科：榎本雅穂・成田公子・松本貴志子・森屋裕治・武岡さおり・阪野朋子、
短期大学部保育学科：平井孔仁子・大島光代・大嶽さと子・河合玲子・児玉珠美・幸 順子、
文学部児童教育学科：渋谷 寿・吉川直志・堀 祥子・村田あゆみ・吉田 文、名古屋女子大学同窓会「春光会」：井東紀代子・構 実千代・松田尚美・吉田嘉子

本研究が推進する「開かれた地域貢献事業」として地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所の両公共施設とのコラボレーション事業は、26年度を無事終えることが出来ました。昨年同様、学内公募で本地域貢献事業への参画を先生方へお願いし、応募していただきました。毎年よい評価をいただき、参加者もリピーターの方が多くなりました。瑞穂児童館との交流事業は、保育・教育、生活関係の8つの講座と児童館クリスマスイベントで6つの企画を行いました。瑞穂保健所との交流事業は、「若返り教室キラキラコース（平成26年度認知症・うつ予防教室）」を支援する形で、5つの企画を行いました。これらは春光会、文学部児童教育学科、短期大学部生活学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所教職員が協力して実施し、参加者の方々に元気をいただきました。

来年度も、地域の方たちと触れ合う機会を持って、学生が成長することを期待します。

(文責：原田妙子)

1 名古屋市瑞穂保健所との交流事業

平成26年9月～平成27年2月

平成26年 認知症・うつ予防教室

「若がえり教室きらきらコース」(沙路学舎で実施)

「音楽に合わせてリフレッシュ!」「染色ハンカチ制作体験」「羊毛フェルトでカラフルコースターをつくらう」「懐かしい童謡や唱歌を歌いましょう」「香りのよいヒノキを使って」

2 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

①クリスマスイベント

「第6回みんなでメリー・クリスマス!」

平成26年12月13日(土)・14日(日)

「クリスマスのオーナメントクッキー作り」「みんなでクリスマスを楽しみましょう」「クリスマスのおはなし」「クリスマスのペーパークラフトをつくらう!」「ぐりとぐらのクリスマス会へようこそ～絵本「ぐりとぐらのおきゃくさま」より～」

②交流事業の各種講座

平成26年8月～平成27年3月

「うごく木のおもちゃをつくらう」「親のメンタルヘルスについて考える一育見期のイライラと付き合いにはー」「乳幼児対象食育相談」「マザリース教室～赤ちゃんへの柔らかな語りかけを楽しく学ぶ」「パソコンでクリスマスカードを作らう!」「子育て教室～子どものイヤイヤ、どうしてる?～保護者の交流と親子遊び～」「おこしものをつくらう」「木のおもちゃを作って科学体験」



音楽に合わせてリフレッシュ!



香りのよいヒノキを使って



ぐりとぐらのクリスマス会へようこそ



子育て教室

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～大正から戦前期の女子教育の諸相～

吉田 文代・遠山佳治・竹尾利夫・吉川直志・嶋口裕基・児玉珠美・藤巻裕昌

本年度の共同研究では、名古屋高等女学校校友会（同窓会）の刊行誌『會誌』の理解を深め、本機関研究の一層の進展をはかることをしました。春子先生や名古屋高等女学校について、第1期（平成17～18年度）で実施した「創立者越原春子先生を偲ぶ集い」に引き続いて、当時を知る本学園の卒業生等の方や教職員に対する聞き取り調査を2回に渡り実施しました。1回目は元職員の今井俊二氏・久枝氏ご夫妻から、2回目は卒業生である上田美代子様、黄木香代子様、そして卒業生であり教員でもあった後藤喜恵様の3名の方からそれぞれ貴重なお話を伺いました。特に春子先生の思い出、公明先生と鐘子先生の思い出、名古屋女子大学開学期の学園状況、高等女学校から新制中学・高校への移行期等の学園状況、当時の授業および学園生活などについてお話を伺うことができ有意義な調査となりました。

また、各自の個人研究としては次年度の大学創立100周年を目前

にし、昨年度よりの研究テーマである「大正から戦前期の女子教育の諸相」のもとで、建学の理念、女子大学としての教育理念を明確にしました。春子先生のお心とご教育についてなど、春子先生に関する事項、もしくは名古屋高等女学校における当時の女子教育について、それぞれの専門分野で関連事象について研究を進めています。

（文責：吉田 文）



卒業生インタビュー（平成26年9月16日）

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究6」

～『学士力』育成のための教育方法の検討～

遠山佳治代・白井靖敏・原田妙子・羽澄直子・富士栄登美子・大島光代・大嶽さと子・神崎奈奈・嶋口裕基・幸 順子

本研究は平成24年度から3年間かけて進められるものであり、平成13年度から研究所機関研究として継続されている「大学における効果的な授業法の研究」（1 情報教育、2 語学教育、3 教養教育、4 初年次教育、5 評価方法）の一環に位置づけられています。

初年度は本学学生と教員に対して学士力に関するアンケートを行い、次年度は主に、文献や会議報告を参考に、他学で実施されている学士力を支える学習支援の方法について議論が行われました。今年度は最終年度として、アンケート結果の分析に基づいて、本学に

おける学士力の現状について議論が行われ、各学部・学科の特徴について検討が行われました。さらに、本学における学士力育成のための取り組みについて、各学部・学科からそれぞれの特色を活かした授業方法等の報告があり、議論がなされました。3年間の研究活動の総決算として、本研究のまとめに向けて検討を進めています。

（文責：神崎奈奈）

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～豊かな言葉の獲得～

幼児保育研究グループ

「豊かな言葉の獲得について」という研究主題のもと、子どもたちのコミュニケーション能力を高めるための実践研究をスタートさせました。初年度としては、様々な遊びを充実させることから、子どもの実態を捉えることを中心に進めています。園生活における言葉の獲得は、個々の成長に加え、人との関わりを充実させることが重要です。その一つとして生活発表会は、表現と言葉を中心としながらも、総合的な活動として取り組んでいます。題材決定から劇を作り上げていく過程の中で、お互いの考えを発表し合いました。役のせりふや表現を工夫し、みんなの考えを生かして協力し合う姿にコミュニケーション能力を高める指導の方向性が見付けられた気がします。

（文責：森岡とき子）



生活発表会の練習風景

プロジェクト研究

「小学校英語活動における他教科と共有可能な汎用的教授法についての研究」

ダグラス・ジャレル代・羽澄直子・服部幹雄

本研究では小学科教員が持つ授業力・教育力を外国語活動に活かし、また他教科の内容を外国語活動に結びつけるような教授法の検証を行っています。

最近注目を集めているのが子どもたちの主体的な取り組みを促す協働学習を取り入れた「プロジェクト型英語活動」です。一つのテーマについての成果を発表するグループ活動を通して、子どもたちは自然なかたちで英語を使いコミュニケーションを図ることができます。多くの教員にとっても協働・調べ学習の指導は他教科で実践済みで、その経験を応用することができます。

日本英語検定協会主催の英語教育セミナー（2014年11月15日 愛知大学名古屋キャンパス）では、「どこの国へ行きたいか」をテーマにしたある小学校の英語活動の実践例が紹介されました。グループごとに調べた国の案内冊子を英語で作り、旅行会社のロールプレイを行うものです。外国について知りたい、自作の冊子を紹介して情報を発信したいというモチベーションが、子どもたちの主体的コミュニケーション活動につながります。

（文責：羽澄直子）

プロジェクト研究 「わらべうたを用いた幼児期の体系的な音楽教育の研究」

稲木真司代・伊藤充子・吉田 文

音楽的な能力を養うために、子どもたちの幼児期における音楽との関わりは重要な役割を担っています。しかし残念なことに、多くの幼稚園や保育園、また家庭における音楽的活動は、最近の研究によって明らかになってきた子どもの発達段階や音楽指導法に沿っていないことがあります。本研究では、幼児や乳児でも音楽活動に楽しんで参加できるように、シンプルで言葉も覚えやすく、子どもたちの声域や発声能力に合ったわらべうたを体系的に取り入れるための研究を行っています。

そのために、まずは子どもたちが普段歌っている歌に着目し、歌の種類や音域、調などを調査し、それらの歌の分析を行っています。最近の子どもたちはインターネットやテレビなどのメディアの影響を強く受け、アニメのテーマソングなどに興味を持っていますが、それらを歌うためには広い音域を歌う能力が要求されることが分かってきています。そのような中でわらべうたが果たすべき役割を引き続き探っていきます。

(文責：稲木真司)

平成27年度プロジェクト研究

「教員養成校における創造的思索構築のための教育カリキュラム検討Ⅱ」

～芸術・教育哲学の観点から～

堀 祥子代・嶋口裕基

平成25年度のプロジェクト研究に引き続き、本年度は芸術と教育原理の観点から教育カリキュラムの開発と提案および有効性を検証していきます。教員養成校を卒業した学生が主体的かつ創造的に自分の頭で考え、自身の内側から出る確かな言葉で人の心に寄り添いながら、子どもや保護者および地域住民とかわりを持つことのできる保育者及び小学校教員の育成をねらいとしています。

先の研究において提案した可塑性を持つ素材による造形的活動の他に、本研究では鑑賞活動にも着目し、自他国の芸術作品や子どもの創造活動に触れる機会を設けるなど、普段の講義形態ではなく10名前後の中サイズのグループでひとつのテーブルを囲む対面形式です。学生の行動や学生同士の対話における語り、アンケートや写真動画記録などを質的データとして研究メンバーで分析をおこない、対話の中で学生が自らの言葉を用いてお互いに思考を深めることを目的とした「語り」の要素の広がり期待しています。

(文責：堀 祥子)



「乳児接触における学生のマザリーズの学習効果に関する研究」

児玉珠美代・神崎奈奈・吉田 文

マザリーズとはIDS (Infant-directed-speech) とも呼ばれ、乳幼児に対して自然に出てくる語りかけ方のことです。いかなる言語圏、民族であっても共通してみられる普遍的な現象であり、乳幼児がマザリーズを好み、乳幼児や母親にとっても多くの効果があることが検証されています。

しかしながら、ここ数年、マザリーズを自然に表出することが困難な母親や新任保育者が増加傾向にあるということがわかってきました。保育者養成校におけるマザリーズのスキル向上のための研究が、今後大きな課題となっていくと考えられます。

本研究におきましては、まずは養成校学生のマザリーズスキルに関する実態調査を実施し、その後、乳児との接触におけるマザリーズに対する意識変化や学習効果の調査を実施していきます。さらに、乳児接触における学生のマザリーズの学習効果を明らかにし、保育者養成校の新たな学習プログラムとしての提案をめざしていきます。

(文責：児玉珠美)



総合科学研究所主催 平成26年度 大学講演会 (9月18日)

「学生募集につながるFD——これからの学生募集戦略——」

講師：山本 繁氏 (NPO 法人「NEWVERY」代表)

平成26年9月18日(木)に開催されました総合科学研究所主催の大学講演会は、学生の確保をテーマに開催され、FDと学生募集に関して全国的に実績のあるNPO法人「NEWVERY」代表の山本繁氏にご講演いただきました。

ご講演では、「学生募集につながるFD～これからの学生募集戦略～」と題し、近年の大学選びの基準は“自分に合った大学”であり、その学生に最適な情報を提供する必要性についてご指摘いただき、これからの学生募集では、FDを通じて教育力を向上させ、その成果を的確に学生に伝えることが大切であるとお話いただきました。また、ご自身の取り組みの1つであるWEEKDAY CAMPUS VISITについてご紹介いただき、オープンキャンパスだけでなく、高校生が大学の「普段の先生、普段の授業、普段の学生」を見て体験することの重要性についてご教授いただきました。本学にとってとても有意義な内容であり、実りある講演となりました。



平成26年度 大学講演会

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂保健所との交流事業「若がり教室キラキラコース」 「染色ハンカチ制作体験」

授業で玉ねぎの草木染めや建染めを体験しましたが、紅花染めははじめてだったので興味深く楽しかったです。紅花の色は赤と黄の2色あり、鮮やかな色でどの作品も綺麗でした。また同じように絞っていても力加減や染まり具合で柄も変わり面白かったです。サポート役としては、上手く説明することができなかつたり、準備がスムーズにいかなくたりと反省点も多いですが、参加された方々と沢山ふれあうことができてよかったです。

短期大学部・生活学科2年



染色ハンカチ制作体験

瑞穂児童館との交流事業

「マザリーズ教室～赤ちゃんへの柔らかな語りかけを楽しく学ぶ」

マザリーズ教室にボランティアとして参加しました。絵本を読んだり、赤ちゃんの体操をしました。最初は少し緊張していましたが、お母さんの赤ちゃんに対する愛情が伝わり、心が温まってきました。

赤ちゃんはマザリーズが大好きです。そして、人と人が繋がっていく柔らかな環境を作ってくれる大切な語りかけ方だと感じました。マザリーズ教室に参加し、お母さんと赤ちゃんの信頼関係がさらに深まってくれたら嬉しいです。

短期大学部・保育学科1年



マザリーズ教室

今年度運営委員

委員長

原田 妙子
HARADA Taeko
(短期大学部)

伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)

間宮 貴代子
MAMIYA Kiyoko
(家政学部)

羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)

森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)

研究所メンバー

所長

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

講師

越原 もゆる
KOSHIHARA Moyuru

職員

松本 由佳
MATSUMOTO Yuka

編集後記

ここに総合科学研究所だより第20号をお届けします。ご執筆頂きました関係者の皆様に感謝申し上げます。本号では本年度の活動の概要をお伝えいたしました。本年度の地域貢献事業でも多くの先生方に参加頂き、好評のうちに終えることができました。大学講演会ではこれからの大学のあり方を考えるよい機会となり、新しい見方考え方を得ることができました。この号において1年間のしっかりとした研究所の成果をお伝えできたと思います。次年度へつなげ、さらに一歩前進できる総合科学研究所での活動となるよう、今後ともご協力をお願いいたします。

文責：吉川直志